

講師 延塚知道先生

《一席》

はじめに

こんにちは、出かけにくい時期ですので「今日はだいぶ減るだろう」と思つて参りましたけれども、こんなにたくさん来てくださいます。こちらの方がたいへん威儀を正されます。お一人お一人のお心に心から敬意を表します。

昨日おとといでしたか、岐阜にお話しに行つてきましたけれども、新幹線の中はほとんどの人がマスクをしていました。それから外国の人が少なくなりました。その辺はたいへん落ち着いた感じになりましたが、しかし皆さん、なんとなく疑心暗鬼といえますか、中にマスクをしていない方がいらつしやると、そういう方が咳をされると、「え」と言つてみんなでいらむ、そういう状況です。しかし、まあ仕事をなさっている方々にとつては、日常の形で動いていましたから、それほど心配することはないと思いますが、大垣の別院の大きなホールでお話をしたのですが、多分少ないだろうと思つたのですが、やはり相当の方がいらつしやつておりました、しかしこれから先、中止になるところが少し増えています。

近いところでは二日でしたが、大分でお話をすることが延期になりました。それから三月の六日でしたが、大阪の南御堂のいつもの講義が中止になりました。全国の別院は三月の上旬はどうも閉じるという情報が来ています。どうぞお気を付けてください、私ばかりかと死ぬと思つています。もう体力がないのでふらふらです。田畑先

生にも申し上げたのですが、来年の安居を担当しているものですから、本を書かないといけないのです。二月いっぱい締め切りでしたから、今日の田畑先生のこの会までにはと思つてがんばつていましたが、実際には二月十日に出来あがつて、本山で今、校正に入っています。

それからすぐ次に「同朋」(東本願寺)という雑誌がありました。それに二年間、『教行信証』を掲載したのですが、それをまた本山が本にするというので、今、まとめています。それを「六月までにまとめてくれ」ということなのですが、コロナウイルスで死ぬかもしれまので、「六月まで」と言っているのですが、多分、三月の十日くらいまでには仕上げて出そうと思つております。

みなさんもこう見回しますと、そう体力があるとは思えません、やるべきことは今のうちにやっておいた方がいいと思います。清沢さんは「仏教者は生死巖頭に立つ」とおっしゃいます。なかなか仏教がないと「生死巖頭に立つ」ということはできません。いつまでたつても生きていけるような気がする。そしてだからだと生きていく。仏教に会えば教えの方から「お前は死ぬ」といつも言われますので、できるだけのことをやつて「命終わつて悔いはなし」という形にしておきたいと思つています。がんばつて今日はお話をしていきたいと思います。

法然上人―浄土教を集大成された

先ほどもちょっと雑談をしていたのですが「真宗の坊さんで法然上人をよく言う人はあまりいない」とおっしゃるのですが、法然上人という方は偉い人です。ほんとに偉い人です。あの方は親鸞聖人のような鋭角的に深く追求していくということはなさつておられませんが、広くつつんでいく、そういう広いおおらかさをもつておられました。だからと言つて浅いのではなくて、深い信仰を持つてい

ながら、できない人のために門戸を開いていく、だからとてもやさしい方であつたと思います。私は法然上人が生きていたらすごい人だつたらうと思います。

書いたものを読めば分かるのです。勉強をしていないからそんなことを言うのです。本気で勉強してごらんさい、法然上人という人は偉い、たいへん偉い。その法然上人が二千五百年の大乗の仏教の伝統を踏まえて『選択本願念仏集』という本をお書きになつたのです。あれは浄土教という視点からすると、インドから始まって、そして中国、朝鮮、日本と伝わってきた浄土教の集大成だと思えます。ご存知のように中国の善導大師が『観経』についてたいへん深い了解を示されて、浄土教をある意味で大成したわけです。善導大師は法然がやつたように浄土教と今まで伝統されてきた大乗の仏教とは違うのだということがよくわかっておられました。だから本来、善導大師のところで浄土教を独立させるといふ仕事をされてもおかしくなかつたはずなのです。

ところが、やはり時代の状況とか、その時の中国の仏教界の状況とか、そのような状況の中で善導大師が十分に果たすことのできなかつたことを、法然上人が引き継いで、そして日本で決定的にやりとげられた。

### 本願の教え

この間お話をしたように、大乗の伝統的にされてきた仏教と、本願の名号という仏教とは、同じ仏教なのですが方向が違います。伝統的には、人間が出家をして、努力して修行をして、そして悟りを覚るといふ、そういうふうな仏教は伝えられてきているのです。

ところが、見渡すと出家をする人はほとんどいない。私たちのような在家生活者がほとんどです。そういう生活者が救われていく仏

教がなければ「仏」とは言えない、仏というのはどんな者でも救わなくてはならない。ある一部分の人だけを救つて、あとはちよつとどうも話にならない、と言っているのは仏でないわけです。だから、仏様の方からすると、どんな人も救わなくてはならない。それを実現するためには、仏様の方が本願の教えを建てた。本願の教えというのは、一言で言えば、自力で生きる生活者を何とかして他力に導いていく、それが本願の教えです。

ですから（これから少しずつ勉強していきますけども）四十八の本願が建てられていますけれども、あの四十八の本願のなかには「自力を尽くして頑張りなさい」といふ本願もたくさんある。しかし、そうして自力を尽くしても、どうしても自力で救われぬ、自力で全うできないことが人間にはある。それを通して世を超える。

### 自力無効

まあ自力無効くらいなら、人生経験の中であるでしょう。

例えば皆さん、今まで偉そうに生きてきたでしょうが、大病をしたらいつ死ぬかわからないと思う。これは当たり前です。それからスポーツ選手でも、泣くほど努力してオリンピック選手になる人もいる、でもそれはほんの一握りですから、なれなかつた人たちは自分の力が及ばなかつた。こんなことはすぐにわかるのです。

それから人生経験が豊富だつたら浄土教に目覚めるのかというと、そうでもありません。私も長いこと京都におりましたけれども、木屋町あたりのお姉ちゃんの方が、人生経験は僕よりも豊富です。だけでも、だからと言って仏教に目覚めたかという、やはり教えというものを聞くという機会がないと、その苦勞が仏教の方に実らない。

高史明さんという方がいらつしやいます。私は高先生が好きで、

高さんの自宅にお邪魔していろんなお酒を飲んで話をします。高さんは自分の息子が自殺してしまつた時に、どうして生きていつていかわからなかつた。奥さんはうつ病になつて、自分もそんな風になつて、どうしていいかわからなくなつた。そういうことを通して『歎異抄』に触れ、それで親鸞聖人の教えにふれたそうです。

これもわかりますかね。仏教というのは、こうやつて勉強をする、教理とか教学ということになるでしょう。だけど、そうではないのです。

### 父との関係

うまくいえないのですが、今から考えたら私の父親は偉かつたと思います。貧しい寺でしたが、死ぬ覚悟で仏教に生きた人でした。だけど、子供の目から見たら、僕は父親があまり好きではなかつた。というか、なんかもう、嫌だつたです。それまで私には父親とは、父親と子供という「横の関係」しか見えなかつたのです。父親だから甘えてもいいと、父親だから迷惑をかけてもいいと思つていた。

ところが仏教の教えに触れたとき初めて父親が輝いて見えました。これまで、あれだけ嫌いだつた父親が初めて(変な話ですが)「他人」なのだということが分かつたのです。あの人は、ちゃんとした「他人」なのだ。一人の人間としてちゃんと人生を歩んできた人なのだ、あの人は貧しかつたけれども、私に何とかして仏教が分かつてほしいと願つていた。その人が僕のようなものを一生懸命に育ててくださったのだ。その時初めて「横」ではなくてちゃんと「縦」の関係があることが分かつたのです。

父さんは仏さんの命を生きていた方なのだ、本願という仏様のはたらきの中で生きてきた人なのだと分かつた。その時、私も初めて仏さんと命が通じ合つたのです。そう思うと、父親というものが

はつきり「他人」と認識できたのは仏教があつたからだと思います。そうでない、この娑婆の「横」の関係だけでみんな見る。そして、自分の「思い」の中だけで生きていきます。夫婦げんかでも「あんな、そんな人だとは思わなかつた」と言われることがあるでしょう。でも僕は「ずつとこんなです」と言いたい。「あんな、そんな人だとは思わなかつた」と言われると、「そう思わなかつたあなたの方の問題ではないか」と言いたくなる。つまり、娑婆はそんなふうな関係しか生きていないのです。

(話が横にずれてしまいましたね)

### 自立できない子どもと親

僕は、今、相談されて、いくつか問題を抱えているのです。それは親子の問題です。

昔は子供が多かつたでしょう。だから、ほつたらかして育てていたのです。ところが、今は一人か二人でしょう。そうしたら一生懸命手をかけて育てるのです。育つた子はどうなるかというラストエンペラーみたいになつていく。みんな笑うけれども本当ですよ、大学に来てごらん。

また話が脱線するけれど、新入生が来るでしょう。コンパというのをやるでしょう、水炊きとか焼き焼きとか鍋みたいなのです。でしょう。昔、僕たちはネギに隠して肉を食べていたでしょう。生の肉でもなんでも食べていたでしょう、しかし今は食べないのです。腹がへつていないのでしょうか、だけど、まあまあ始まつたら食べるのです。

これは本当の話です。ある時、僕の横に座つていた男の子に「おい、食べる」と言うと「はい」と言う。でも、じつとしていて、「君、飲まないのか」と言つたら「飲まん事はありません」と言う。そこで

ついでやったらグーと飲む。でも、じつとして最初から最後まで食べなかった。不思議でしょう。それで友達に「あれは体調が悪かったのではないか」と聞きにゆかせた。そこで友達が「なんで食べなかったのか」と聞いたら、彼は何と言ったと思う。「誰もついでくれなかった」と言ったそうです。

これはうそではないのです。これが大学生です、幼稚園生といっしょ。いいですか、そんな子がどうして自立をするのでしょうか。

本来は親から子が自立するというのは中学が高校くらいでしょう。(僕だって高校くらいでした。高校に入っすぐ、いろんなことを思っ、初めて父親を他人だと見えた。その他人が僕と一緒に生活をしてくれて、僕をここまで育ててくれた。それから僕は父親に一回も文句を言ったことはないのです。)

ところが、それがずっと続いて四十、五十になっても親から独立できないのです。そして引きこもって仕事をしないのが日本中に何十万人もいるのです。今、その親が八十も九十にもなつて「子どもはどうなるの」と相談に来ることが多いのです。八十のばあさんが「この子をどうしたらいいだろうか」と悩む。「もう、はよう死ね」と思う。それは冗談ですが、世話をしても自分の方が先に死ぬ、そういうことはちゃんとわかっているのだから、今までどうしてちゃんと育てなかつたか。四十も五十にもなつて、初めて親と喧嘩して家を飛び出したとか・・・これは独立宣言したいわけです。そんな相談が、今、僕の近くであるのです。

それでもう一つ言います。

親は何も悪いことをしていない。一生懸命かわいいがったのです。だから「自分はいいことをしている」と思っている。だから親は絶対に反省ができない。高史明さんはそう言うのです。自分は一生懸命

子どものために生きてきた。そして家を建てて、あいつのための部屋も作つてやった。・・・そして自殺しているのを見たら「僕は大きい部屋より、小さい部屋がよかつた」と書いている。

一生懸命してやったのに、だから親としてもなんで死んだかわからない。その理由を一生懸命仏教に聞いてわかれようとした道筋が、高さんのその後の人生でした。だから「今ははつきりわかる」と言われる。「自分はかわいがっているという形で、子供にものごく大きなプレッシャーを与えていた」「いいことをしているから、それがわからなかつた。だから恐ろしい」と。そこから、はじめて『歎異抄』に触れていかれたわけです。

本当にそうです。よほど気を付けないと親と子の関係だつていびつになります。親と子だけではない。奥さんとの関係だつてそうです。どうですか、一番難しいでしょう。それから嫁と舅です。全部そうです。そういうものが一体どこで融けていくのか。

#### 『選択集』―浄土教の完成形

さっき言ったように、みんな如来の命を生きている、そういう大きな仏教の世界の中で、初めて、人間の関係が横ではなくて縦に見えるようになる。「あなた方一人一人、全部、命の底から如来の呼び声を聞いて、必ず仏になる人たちです」そういうふうな尊敬の念をもつて見れる。子供でもそうです。いつも「親だから(子どもを)尊敬しなさい」というのではない。だけど、どっかでそういうものがないければ、必ず自分の所有物のようにする。そうすると子供は爆発します。

仏教がなかつたら、そんなになりますよ。わかりますか、仏教がなかつたらそんなになるのです。仏教は教理とか教学をちゃんと勉強しなくてはいけません。そして、それがどういふことなのかとい

うことが、生活の中でわかっていくことが大事です。私たちの生活の中で仏教を根付かせていきたい。それが浄土教の教えです。

だから仏の方から「出家しなさい」とか、「戒律をたもて」とか言わないで、生活の中で、仏の方から教えを説いて、自力から他力に導いていく。仏様の方がこの世からこの世を超えたものに導いていく道筋を立ててくださる。

もうちよつと言うと、私たちは一人一人、生まれてから今日まで、出会った人によって成り立っています。どんな人に出会ったか、どんな親だったか、どんな学校の先生に出会ったか、友達に出会ったか、そういう人たちの影響によって、いつの間にか私は作られていく。だから自分でも自分をどうしようもないことがたくさんある。それは自分で自分を作っているのではないからです。だから、仏さんはそれをよく見ているのです。つまり、出家をして戒律を持たなくても、人間が出会っただけで分かる宗教にしよう、と。だから浄土教は教えに会っただけで分かるのです。

そこまで仏様の方が私たちに手渡すために苦勞した仏教を、法然上人の『選択集』は、ある意味で、浄土教の教学を完成させています。二千五百年の仏教の伝統を踏まえて、あれは浄土教の完成形だと考えていいのです。「念仏ひとつ」、すばらしいではないですか。出家をしないで念仏ひとつで私たちはわかる。そこまで浄土の三部経をひとつの教義にまでしたということは、素晴らしい書物です。

凡夫に帰ってゆく

ところが、そういう『選択集』があるにもかかわらず、親鸞聖人がなぜ『教行信証』を書かなければならなかったのか。それが『教行信証』の独自性にもなるし、それから『教行信証』の課題にもなります。そのことを尋ねようとして、この間は「善導大師の教えに遇って法然

上人は救われた」というところで引つかかり、浄土の仏教と聖道の仏教との違いを、この際きちつとお話をしておいた方がいいと思つて、お話をしたところでした。

親鸞聖人も法然上人も、比叡山で二千五百年の伝統をもつ仏教の勉強してきたのです。けれどもそれでは救われなかった。だから法然上人はそこから下りて、善導大師の教えに出会い、浄土の教えに徹底的に帰依していくわけです。

聖典ですと、二百七十七ページ、終わりの方から三行目のところ。そこに「一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、これを正定の業と名づく、彼の仏願に順ずるがゆえに」とある、こういう言葉です。

法然上人はこの言葉に遇ってオウオウと涙を流して泣いたそうです。私たちは「何の事だろう」と思うでしょうが、これまで一生懸命に自分の方から仏になろうと思つてがんばつて努力をしてきたが、どうしても出来なかった。そのとき、全く反対の方から、仏の方から「そういう人こそ救われなければならない」といつて建てられている本願の教え、反対の方向の仏教に触れたのです。

「一心に弥陀の名号を専念しなさい、南無阿弥陀仏を称えなさい、こんなことで救われるはずがない、と僕は思いますね。けれども、「立つていようが座つていようが、寝ていようが、時節が長い、あるいは短い、ということを問わない、一心に念仏しなさい。念仏をすれば必ず往生浄土ということが実現します。それが正定の業、南無阿弥陀仏です。なぜなら仏の本願による行だからです。」

自力によって仏になるのではなくて、本願が建てられ、本願によつて念仏ひとつが選ばれ、本願力、念仏によつて必ず仏になるという仏教に触れたのです。

このあいだ申し上げたように、聖道門の方は人間から果の悟りを

求める仏教です。ところが浄土教の方は、悟りの方から人間の方に念仏として来てくださって、この果の悟りを念仏のところを開いてくださる。こういうふうになんか反対の仏教があるのです。

聖道門の方は人間が仏になるのですが、浄土門の方は人間が凡夫に帰って行く。宿業の身に帰って行く。皆さん一人一人の命の深いところから促して来ている本願の教えに目覚めていく。人間は頭がいいから中途半端、どっちつかずにうろろしているのではないですか。

### 本願に帰してゆく道

『観経』のように病気になるって命がないと、ぎりぎりのところで最後には「自力で生きてきたのではない」ということがわかるのです。何の力もない、そういうものに帰って初めて「いつまでそっちで我を張ってがんばっているのか、我が名を称えて我が国に帰れ」と、命の深いところから促している声を聞く。今も呼んでいるのです、分かんだけです。

もし、人間が「自我」だけで生きていたら、勝つか負けるかですか、けんかして勝ったら「やった！」です。昼間は興奮しているが、夜になったら「あんなこと言わなければよかった」と思うでしょう。あれが自我よりもっと深いもの、自我を超えたものと関係しているという証拠です。もし自我だけだったら勝ったことを喜んでいてだけでいいです。だけど必ず反省をします。「ああ、あんなことを言わなければよかった、あの人も一生懸命にやっているのに、あんなことを言わなければよかった、しまった」と思うでしょう。あれは自我を超えたものと関係している証拠です。

「如来の本願」というものが人間の「自我」を通して表れてくると貪瞋痴の三毒になる。本当は「自由になりたい」とか、「私が私にな

りたい」ということかもしれない。けれどもその願いが「自我」を通ると、地位と名誉を得て自由になろうとか、もつと金を儲けて自由になろうとか、いうようになっていく。

「皆さんどうなりたいのですか」と聞いたら、「わからん」と言う。「本当になりたいもの」が分からないのが人間です。「本当の救い」というのが何かわからないのです。「どこから生まれてどこに帰るのか」もわからないのです。人生の一番大事なことが本当は何もわかっていないのです。ただ思い付きで生きています。分かったつもりでいる。

それが親鸞聖人や法然上人のように、自分はなんにも分かっていなかったと、はつきりして凡夫に帰る。はつきりと「なんにも分らない」と分かったときに、初めて、命の深いところから「我が名を称えよ、我が国に帰れ」と呼びかけている本願に頭を下げて帰す。

だから浄土門は因の凡夫に帰って行く道、本願に帰して行く道。本願に帰すれば、本願力によって彼の土で必ず仏になる。だから「本願に帰する」ということがはつきりすれば仏になることは何も難しくないと『教行信証』に書いてある。ただ「本願に帰す」という信心が難しいと書いてある。

そのような南無阿弥陀仏の教えに法然上人が目覚めて、その称名念仏というのを中心にして書かれた書物が『選択本願念仏集』です。だから本願の念仏です。ある意味、私たちの頭は、理屈とか理由とか、そういうものを求めます。けれども「無義をもつて義とす」何も考えない方がいいです。「ただ念仏しなさい、必ず念仏によって仏様の世界に生まれていくから、念仏しなさい」

そういう意味では浄土教はある種、完成形です。『選択本願念仏集』というのは浄土教の完成した姿と言ってもいいのです。

この講座はだいたい五年間だとお聞きしています。そうすると五年間で一応、教・行・信・証くらいまではお話をしなくてはならない。教・行・信・証で四年ということは一つの巻で一年、今は助走だから、これで一年。計算が合います。そういうご要望ですから、年に六回ありますから、教の巻だったたら、「教の巻を六回で終わらなさい」ということです。

教の巻だったたら、どう言うふうに話すか、どこに中心があるのか、そして親鸞がどう言っているのか、それをやるのが僕の仕事。それが僕の勉強だからやらなくてはなりません、考えてみると、いい課題を与えていただいたと思っています。

今は、『教行信証』に入るまでの助走をしているのです。今日は三回目です。あと三回しかない。しかし『教行信証』は総序も読まなくてはならない。総序と後序くらいは見ておかないといけない。あまりぶらぶらしておれない。

#### 『教行信証』を書かれた理由

親鸞聖人はなぜ『教行信証』を書かなければならなかったのか。

ひとつは『選択集』は『選択本願念仏集』という題が示すように、称名念仏を核心に据えて、浄土の三部経を総合的に読んでいる書物と言えます。

それに対して、(これから少しずつ見ていったらわかりますが)、『教行信証』はどうでしょう。『教行信証』は信の巻に別序があります。ですから『教行信証』はだれが読んでも「行の巻よりも信の巻が大切だ」というふうに読めます。事実みんなそう読みました。だから、親鸞聖人の弟子の中からも、「法然上人は念仏ひとつでいいと言っているではないか、親鸞聖人はどうして信心、信心というのか」という疑問が出ました。

それは『教行信証』の構造がそうなっているからです、信の巻に別序を設けて、信の巻が中心になって『教行信証』全体が成り立っている。(それはまた後でお話をするとして)、『選択本願念仏集』は「称名念仏」が中心になっている、とすると『教行信証』の方は信心と言っても「本願の信心」が中心になっています。『選択集』の特徴は称名念仏ひとつで浄土教全部を収めている。ということになります。

浄土の三部経、ご存知ですね、『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』、これが浄土の三部経です。称名念仏を中心に説くのは経典で言うと、『観無量寿経』です。これから何度か出て来ると思いますが、『観経』の一番大切なところは、上品上生から下品下生まで書いてあるが、その下品下生のところですよ。

#### 高光大船「おい、お前、死ぬぞ」

病気になるって命が終わりそうになる、そうするとどうしても仏教をわからせたい、死ぬ時くらいは、仏教が分かって「仏さんの世界に帰って行く」という感動がないと死んで行けません。だからご家族もみんな、いろんなことを言う・・・

高光大船という人がいて、お弟子さんがいて、その人は一生懸命高光先生の話を聞いていたのだそうです。その人が癌になったそうです。そして死にそうになって「先生、ちょっと来て、もう主人が死にそうですから、何とか言ってやってください」と奥さんが言ってきました。すると高光先生は「俺知らん、そんなところに行くか、人の死ぬところには行かん」と言って行かないのです。そうしたら「そんなことを言わないで、『観経』でも善知識が来て、最後に教えてくれる、苦しんで死ぬのが不安だと言っているのだから、何とか言ってやっ

てください」と言つて奥さんが何度も頼みに来るのです。それでも「行かない」と言つているのですが、最後には行つて、ずかずかと上がつていつて「おい、お前、死ぬぞ」と言つて帰つたそうです。

よく掲示板に「お前も死ぬぞ」と最近、書いてあるでしょう。あれを一番先に言つたのは高光大船です。

「おい、お前、死ぬぞ」と言つて帰つたのです、そうしたらその人がうれい顔をしたと言うのです。そうなのです。「死ぬ」ということも引き受けられないのです。それを最後に「死ぬぞ」と言われて、高光さんが言っているのだから「死ぬのだ」と思つたのでしょうか。「おかげで、主人、明るくなりました」と奥さんが言つていた。

### 称名念仏を説くのが『観経』

それと同じように『観経』の小品では「仏さんのことを思えと言つて無理かもしれない、それなら念仏しなさい、南無阿弥陀仏を言いなさい。そうしたら仏さんの世界に最初からいたということが分かる。仏さんの命をいただいて、仏さんに今日まで生かされてきた、そしてまた仏さんの世界に帰つて行く。それが念仏したらわかるから念仏を称えなさい」と一生懸命に教える。それが小品下生のところにある。

『観経』は本当は『観無量寿経』と言います。仏を見る経典だから、中国では爆発的の人気になつたのです。聖道門の方がみんな喜んだのです。仏を見る経典ですから、聖道門の人たちが書いた『観経』の注釈書にはみんな「仏を観る」という「定善十三観」というところがある。「ちゃんと座つて修行して仏を観る」ということが説かれていま

す。そうしたら、人間は上品上生から下品下生までいるけれども、下

品の人はみんな生活をしているのですから、「ちゃんと座れ」と言つても座りません。しょうがないから、それができない人のために、「分かつた。今日から悪いことをするな、善いことをしなさい」と言うのです。

(皆さんこの次に来る時まで、それをやつてください。ほんとは。廃悪修善 悪いことをするな、善いことをしなさい。二か月くらい頑張つてやつてごらん、それくらい間がないと・・・)

善導大師はそれを本当にやつたのです。そうしたら、そもそもそんな根性は自分に無い、すぐに怠けて、人が誘うとすぐにろくなこととはしない。考えていることもろくなことではない、困つたものだと悩むのです。

清沢さんも一緒です。清沢満之という人はそれをやつたのです。でも「善いことをしなさい」と言われても、よく考えてみると何が善いか何が悪いかが分からない。がんばつていこうとしてもすぐに怠けてしまう。だから清沢さん正直に言います。「何が幸せやら、何が不幸やら、何が善やら、何が悪やら、何が真理やら、何が非真理やら、一切知る能力のないもの」と。それでも生きています。今まで生かされているでしょう。そして何事かをやつてきたでしょう。それはなんでか、ということになるのです。

「私を虚心坦懐に生かす根本本体、それが私が信ずる如来であります。」そこで、ひっくり返る。自分を生かしていたものに目がひっくり返るのです。

そんなふうにして「称名念仏、下品下生の称名念仏が大事だ」と説くのが『観経』です。「皆さん心配することはありません。死ぬときにわかります」そう説いているのが『観経』です。そして「念仏しなさい」と説いています。



善導大師は「下品下生の念仏ということを教えるために、その前の定善の悟りを覚りなさいという部分があるのだ」、こう読むのです。聖道門の人たちは「前の悟りのところが覚れないから、しようがないから方便の教えとして凡夫に説いているのだ」と読むのです。（ここもちゃんと講義をするとおもしろいのです）だけど、わかる人はわかるように言っている、わからない人にはわからない。ともかく称名念仏を説くのが『観経』だということを頭に置いておいてください。

### 信心を説くのが『大経』

それに対して『大経』という経典は、これを七祖でいうと龍樹菩薩、世親（天親）菩薩、曇鸞大師です。こういう人たちは『大経』を中心に生きた仏教者たちです。

龍樹菩薩は「信方便の易行」というものを初めて説きました。（これも行の巻に行つたときにまたお話をします）「信心による仏教があるのだ」と。本来、菩薩道は「出家をして、修行し、そして悟りを覚る」という仏教なのですが、そうではなくて「仏の名号を信ずるという道がある」ということを初めて明らかにした人が龍樹です。だから龍樹は「信方便の易行」と言います。

世親菩薩は、皆さんよくご存知のように「世尊我一心、帰命尽十方無碍光如来 願生安樂国」これを表明しました。これが『大経』による信心の表明です。

曇鸞大師は世親菩薩の『浄土論』を注釈しました。これは大変難しい書物です。『論註』の一番最初、易行品釈のところに「信仏の因縁をもつて（龍樹が説いた易行の仏道は仏を信じるということを因縁にして与えられていく道です）」ということが出てきます。

これで分かるように、『観経』は「称名念仏を説く経典」、それに対して『大経』は「信心を説く経典」です。まずはそれをよく知っておいてください。知っておくというよりも、もう腹に入れておいてください。

親鸞聖人の『教行信証』は、最初に『大無量寿経』というものを標拳ひょうけんに立てますから、信の巻（信心の巻）を中心に全体が説かれているということになります。

序文のあとに標拳ひょうけんとよばれる見出し（サブタイトル）のようなものが付いている。

### 大無量寿経 真実の教

浄土真宗

だが、この位置が変なのです。なぜ目次の前なのでしょう。序文の後に目次という書式は今でも見受けられるからまだわかるのですが、この標拳は教巻の見出しであって、教巻の題名のすぐ後に置くべきではないのか。実際、他の巻はそれぞれ題名のすぐ後に標拳が付いています。それが自然だし、また、そのように修正して出版されている本もある。しかし、親鸞はそんな初歩的なミスをしたのだらうか。字の写し間違いならまだしも、こんなミスは仮にしたとしても気づくはず。とするなら、この標拳の位置は、親鸞が意図的にそうしたものだと考えねばならないでしょう。教巻のみの見出しというだけでなく、『教行信証』全体の見出し（サブタイトル）としてこの位置に置いたと考えるべきなのです。

つまり、教巻で『大無量寿経』を扱うというよりも、『教行信証』という書物全体が大経論なのだ。のちに教巻で出てくるのですが、親

鸞は『大経』の中心を「本願を説く」ことにあると押さえている。だから、大経論すなわち本願論と言つてもよい。『教行信証』はそれぞれの巻を切り離して読んではいけない、本願論としてのつながりを読まなくてはいけないのです。

## 行信不二

そうすると『選択本願念仏集』は『観経』によって浄土教全体をつかまえた書物、それに対して親鸞聖人の『教行信証』は『大経』によって法然上人の仏教を継承した書物だということが分かります。そうすると、『観経』と『大経』の違い、これは簡単な話です、『大経』は「信」、『観経』は「行」でしょう。

普通、私たちは頭がいいから（考えるから）行と信とはどうしても別にあつかう。「行」は実践、「信」は信じる心と、どうしても行と信は別のことになってしまふ。

明恵上人がそうです。浄土教を批判した明恵上人は「行と信は別だ」と考えるのです。それは親鸞聖人の関東のお弟子さんの中にもいた。お弟子からたくさん聖人のところに手紙が届くのですが、その中でいつも行と信を別に考えている。

そうではなくて「ただ念仏して弥陀に助けられなさい」、こういう教えに遇った時、（みなさんの中に教えに遇った人がいるでしょう、勘違いでもいい）本当の教えに遇うと身の方が先に反応するのです。

石川啄木の歌に「たわむれに 母を背負いて そのあまり 軽きに泣きて 三步歩まず」というのがある。石川啄木と言つたら今では有名だけど、五十も六十もなつて東海の磯でカニと戯れている。五十になつてぶらぶらしている。それはお母さんにしたらたまつたものではない。歌かなんか知らないが、おかしいのではないかと思

う。それでおそらく苦勞してやせ細つたのですね。啄木は苦勞を掛けているとは思つてはいたが、ちよつと背負つてみた、するとあまりに軽かつた。そこで、そこに泣き伏して「ごめんなさい」とあやまつた、ということです。

本当にものに触れるというのはそういうものです。「お母さん、どうもご苦勞様でした」と言うのはあかんです。そんなのは本當に触れていません。本當にものに触れたら、こつちの方が「ごめんなさい」と「身」を投げ出す、それが本當に触れたということです。

今まで偉そうに何もかも分かつたように言つてきたけれども、**仏さんは、五劫の昔から何にも分かんないことを見抜いて、本願をたて、念仏にまでなつて来てくれている、そういう念仏の教えに触れたときに、身の方が先に「ごめんなさい」と言つて五体投地するのです、実践の方が先です。**

だから念仏申さんと思ひ立つ心に、念仏を信じる心がついて来る。行の方に、実践の方についてくる。だから行信不二という、これは当たり前話です。念仏申さんと思ひ立つ心、「念仏」と「心」がひとつになる。これが浄土教の本願の念仏の特徴です。

「真実」というもの、「実践」というものは、そういうものです。

法然上人は「念仏ひとつ」と言つた。親鸞聖人にしたら「その通りです」。ただ、「念仏ひとつ」ではよくわからないから、信心の方を開いて、「なぜ凡夫が救われるのか」、「どうして本願によつて救われるのか」ということを証明された。法然上人が「念仏」と言つた。それを親鸞聖人は『大経』の方から、信心の方から、明らかにした。「行」と「信」を別々に分けているようですが、これは別なことを言っているのではなくて、初めからひとつのことを言っているのです。そんな関係になつていっているのです。ところが読んでいる方が行と信とを別

に考えてしまう。こちら（読む）側の問題です。

法然上人は「念仏」、親鸞聖人は「信心」と分かれているが、これは紙の裏表みたいなものです。法然上人は「念仏」を表にして『選択本願念仏集』を書いた。親鸞聖人は「信心」の方を表にして『教行信証』を書いたのです。でも決して別なことを書いてるわけではないのです。そういうことをよくわかってください。

ちよつと休憩しましょう。

## 《二席》

それでは、もうしばらくお話をさせていただきます。

（大丈夫ですか、難しいですか。仏教というのはなかなか難しいですね。）

死ぬときに分かることを「今、分かれ」

私たちは生活の中で、ぶつかったり、具体的に問題になったりすることを抱えているでしょう。その問題に直接答えるのではなくて、その困っている問題を、その人個人の問題でなくて、人間の問題にするかどうかということなのかと、よくよく考えて、それを思想的に昇華していく。ここまでくれば世界中の同じように困っている人の問題に答えられるというふうには、現実の問題を思想として昇華し、問題を煮詰め、その煮詰めた問題に対して仏教は応えるのです。そのために、現実の問題と思想にまで高められている問題とはギャップがある、と僕は感じてしまうのです。

だから、なかなか難しいな、と感じるかもしれませんが、十年間いていけるとわかると思えます。そういう難しさがありません。

直接答えるのなら、ものすごくわかりやすいのです。

『歎異抄』は説法だから、誰かが聖人に『こんなことがあるのです』と聞いている。聞いている方の問題はほとんど収録されていないけれども、何かを聞いているのです。その問いに聖人が「それは、こういうことよ」と答えている。それが『歎異抄』です。それに比べて、『教行信証』の方は、それをもう少し世界の人間の問題にまで高めて、それに対して本願とお念仏がどう応えていくか、ということをやっているのです。少し難しく感じます。だけど、そういうものに少しづつ慣れて、少しづつ勉強してください。そうしないとそのまま終わりますよ。

そのまま終わってよければ何の問題もないけれども、死ぬときに分かることを「今、分かれ」というのが『大経』です。『観経』は、もう命が終わるときに、ぎりぎりのところになって「念仏せよ」と言われ、「あ、そうか、仏さんの世界に最初からいたのだ」とわかる。それを「今、分かりなさい」というのが『大経』です。

だから人生の中で行き詰ることがあるでしょう。身内が死んだとか、ご主人が死んだとか、子供が死んだとか、それとか離婚したとかいろいろな問題があるね。そしてどうしていいかわからなくなる。それを縁にして「今、分かれ」、それが『大経』なのです。それを『観経』の方は「この世で命が終わるとき」という一番わかりやすい形で行っているのです。ところが『大経』の方は、この世で実際に命が終わらなくても、人間として行き詰まって、どうしていいかわからないことがある、それを命の終わりと思つて、そこに世を超えたものに目覚めないと救われませんよという。それが『大経』です。

それがわかっただけなら救われませんよという。もうちよつと顔つきがよくなるから。もう少し楽しくなるから。一人が分かっただけなら周囲がみんな喜ぶから。

中村久子さん

高山に中村久子さんという人がいたでしょう。手もない足もない、子供の時から見世物小屋に出されて、筆を口にくわえて字を書いて、だけど女性だから年頃になると悲惨なものです。手もない、足もないのですから、男のするままです。ひもについた男が金を持って女のところで飲んで回る。形だけは結婚していますが、結局はひもずるです。だけどそんな旦那でも「金持って色町を歩いている」と思うとたまらなかつたと書いています。泣いても拭く手もない、首を吊りたくても吊る手もない。

そうやって生きて久子さんが、やはり分かるのです。世を超えたものに目覚めるのです。「手がない足がない」それはどうでもいい。「手がない足がない」ということが、世を超えたものに自分を導いてくれる縁になった、という歌を書いている。「ある、ある、みんなある」という。「夫がある、小さいけれど自分の手がある」。思った以上のものが与えられていた。

そして久子さんが変わるのです、そうしたら、やくぎの父ちゃんが変わるのです。久子さんが変わって、そしてやくぎの父ちゃんが変わるのです。そして「お前は仏さんや、えらい。今日からおれはお前の手足になる。お前は全国の暗い顔をしている人のところに行つて話をしてくれる。俺がお前の足になる」と言つて、そのやくぎの父ちゃんが全国を久子さんを担いで回ります。そして、久子さんは、一人でもわかつたらいいと、遊説をして回ります。皆さんの顔はだいたい暗いね、人間はまじめになると顔が暗くなるから・・・。

浄土宗の独立―法然上人が命をかけたこと

法然上人は、なんども申し上げましたが、日本のこの地で、聖道と浄土の仏道の違いを明確にして、どんな人も救われる仏教は浄土教しかないのだということ、どうしてもはつきりさせたかった。それは大事業です。ところがわかるでしょう。法然上人の弟子は三百八十四名と書かれていますから、三百八十人ちよつといたのです。ところが日本を見てごらん下さい。比叡山、東大寺、奈良の仏教、それから高野山と、ものすごい数です。そんな中で、三百八十人くらいの訳の分からん奴が浄土教の独立を言う、そんなことをかれらが許すはずがない。

まず、そもそも善導大師の文章によつて廻心された。だから、「私はひとえに善導一師によつてこの日本に明確に浄土宗というものを独立させたい」と願われた。

それまでは、浄土宗というのはひとつのグループではありませんでした。そうではなくて天台宗の中のある一部に浄土宗を勉強しているところがあつた。あるいは高野山の中に念仏について勉強しているところがあつた。ですから、今で言えば『法華経』を中心にする大学で親鸞のゼミがちよつと開かれるぐらいもので、浄土宗が独立するということは一切ありませんでした。

ところが法然上人は「浄土宗の方が本道の道だ、浄土宗こそ本当の仏教。聖道門というは自力無効ということをはからせるための方便だ」と考えたのです。それを日本で果たそうとするわけですから、これは殺されます。

事実殺されました。比叡山の下坂本というところに行くところになります。神輿があります、ものすごく大きな神輿です。ともかく大きい、弁慶みたいな人が担いでいたのだから、十メートルくらいある神輿が今でも飾られています。昔は、今でいう警察が分かれていたのです。寺社奉行と一般を取り締まる警察とに分かれていたのです。

す。だから比叡山の僧は自分たちの気に入らないことが起こると、あの神輿を担いで町中を練り歩くのです。今でいうデモですが、それを町中を取り締まっている警察は手を出せない。だからやりたい放題です。弁慶のように武力を持つているのですから、今で言えばあれは軍隊ですから。そこでやると確実に殺されます。

だから多分法然は命を懸けたのだと思います。命がけで浄土宗を独立させる。「善導一師に依る」というのは中国の思想です。今で言うなら中国の思想を直輸入しているのです。もともとあった日本の仏教は無視しているわけですから、それは日本の仏教徒は怒るでしょう。もう初めから絶対に許さないというのはあたりまえです。ところがそれをやらなければどうにもならない、だから法然は命を懸けたわけです。

しかも、それまで浄土教はないのです。だから三百八十四名の弟子は全員聖道門だと思ってください。聖道門出身、事実そうです。『選択集』を書写したお弟子さんたちが五人おります。親鸞を含めて六名ですが、全員聖道門です。しかもその中で戒律を保っていないのは親鸞だけです。あとは全部、きちつと戒律を保った立派な人たちです。法然も戒律を保っていた。隆寛りゅうかん、幸西こうさい、源智げんち、聖光しょうこう、証空しょうくう・・・五名おります。その人たちは全員戒律を保った比叡山の沙門です。

ということとは三百八十名の弟子たちはおるけれども、その人たちは「念仏ひとつ」で結集したのです。おそらくかれらは比叡山での落ちこぼれたのでしょうか。そして念仏によって救われたという感動を持つて法然のところにみんな来たのです。その三百八十四名が全部聖道門です。

## 信心同一の問答

僕が言いたいののは、今日、皆さんここに来るでしょう。みんながするのは「南無阿弥陀仏」でしょう。この次から受付で「信心見せてください」と言われたら、帰るでしょう。そういうことです。「念仏」というのは法だから、「法」というのは全部を包むことができる。だからここにお参りいただいた皆さん「礼拝しましょう、お念仏しましょう」、これはみんな共通、全部を包む。でも、「信心」というのは一人一人の了解だから「あんた、それどう」と聞くと、門下が割れます。実際、親鸞聖人が若いとき、(この中に勉強している人がいるでしょう)、「信心同一の問答」というのがあった。これは『歎異抄』の中に出ています。

親鸞聖人は若いころから『大経』の仏教者です。この前言ったように出世本懐経というのとは二つある。『法華経』と『大経』、これが大乘仏教の出世本懐経です。親鸞聖人は比叡山で勉強しているときから『法華経』はもちろん勉強しているけれども、もう一つ『大経』も勉強をしている。だから親鸞聖人は若いときから『大経』の専門家です。

五十過ぎて、風邪をひいて(今でいうインフルエンザです)熱を出して寝ている時に『大経』の文章が一字一句出てきたと言われている。みなさん、出てきますか。食べ物の夢か、そんなことしか出て来ないでしょう。一字一句出て来るといえるのは、これは勉強した読み方ではない、身につけているのです。子供の時からやっている。『大経』は比叡山の時から身につけていました。

法然門下に入った時に親鸞以外の弟子たちはみんな法然の小型です。『観経』です。(『観経』を主に学んでいるという意味です)だけど親鸞だけががうのです。(『大経』を勉強したいたという意味です)あれは入ったときから毛色が違う。

『歎異抄』の「信心同一の問答」をみなさん知っていますか。

ある時、親鸞が「私の信心と法然上人の信心とは一緒だ」と言っただ。そうしたら「そんな馬鹿なことがあるか、お前はこの前入門したばかりではないか、そんな若造の信心とあの法然上人の信心と同じという、そんな馬鹿なことがあるか」と言っただ問題になるのです。でも親鸞は「信心は一緒なのだ」と言っただもめるのです。

この問答と同じ問答が『御伝鈔』にも出てきます。

『御伝鈔』の方は、親鸞が法然より先に「いや『大経』の信心というの自力の信心ではない、自力はもう間に合わないということを通して仏さんの世界に目覚めた信心、向こうから、如来からいただいた信心なのです」と言います。ところが『歎異抄』の方はごちゃごちゃともめて始末が付かなくなっただ、「法然上人に来てもらおう」ということになる。そして法然が来て「これは如来より賜りたる信心だから、善信、あなたというのが正しい」と言われた。こういうふうになっただいます。

「如来より賜りたる」というのはちよつと難しいですが、和語で言うた「如来よりたまわりたる」という言葉です。漢文に直すと「本願力回向の信心」と言うたのです。「本願力回向」というのは、『大経』にしかありません。『観経』にはありません。『観経』には自力無効までしかありません。これは『教行信証』の巻の巻に行つたときにお話しすると思ひますが、親鸞聖人は法然上人の念仏は「不回向の行」だと言っただいます。「人間の方から回向しない」という意味です。人間の方から自力で回向するたか、あるいは人間の方から何とあして仏に回向するたいうたことをしない。

『観経』では不回向、ここまでしか言えない。それを『大経』では、本願力によつて、向こうから念仏が回向されてと言う。仏様の方か

ら回向されている、というたことを説くたのが『大経』です。これはこれから少しづつ勉強していきましよう。

あの「信心同一の問答」は僕は多分『御伝鈔』の方が正しいと思う。親鸞の方が先に「自力で回向するたのではない、こちら側は自力無効なのだ。だから如来の方から回向されているたいうたことが他力の信心なのだ」と言う。そう親鸞が言うた、法然は「そうだね」と言うたのです。それが正しいと僕は思ひます。

いづれにしても、そこでは「信心」が問題になつている。

人間の信心はあてにならない

念仏を称える信心はどういう信心か、これみなさんどうですか。うまく言えませんが、人間の信心なんてあてにならないでしよう。気分がいいときは仏さんを信じているたような気がします。気分がいいときは「今日は天気がいいし、生かされている」と思う。雨でも降ると「コロナウイルスがはやっていかん」と思つて暗くなる。「何が仏さんや、ああいやだ」とすぐに変わるでしよう。

だいたい人間の信心などと言うたものはろくなものはない。学生にもよく言つていました。「お前の彼女が『あなたのことを信じています』と言つたら、それは一番危ないぞ」と。信じていないから、『信じています』と言うたのだから、もし彼女がおまえのことを「信じています」と言い出したら危ない。ほんとうです。ぼくら「信心」と言うた私たちの心に起こるたのではないかと思ひが起こらない、信心なんて、そんなたことは死ぬたまで起こりません。

信心ー仏さまの世界に目覚めた心

『大経』とか浄土教で「信心」と言うた場合には、人間の信じる心理



作用を言っているのではないのです。ここではつきり言います、「悟りに目覚める」ということです。「如来の世界に目覚めた心」を信心と云うのです。聖道門だったら「悟りを覚る」ということ。それを凡夫だから修行もしていないのだから、「悟りを覚る」ということは言えない。だけど如来の世界に会ったのです。大きな仏様の世界、初めからある仏様の世界に目覚めた心を「信心」と云うのです。それは悟りを覚った心と同じ心です。それを浄土教では「信心」と云うと考えたほうがいい。だから信心を得るのは難しいのです。

人間ははじめから相對・分別を超えた一如の世界に生まれてきているのです。赤ちゃんの時はそうだったでしょう。人間は一如の世界にいたのです。それを言葉によつて自我ができた時に忘れたのです。、だけど、今も、ほんとは一如の世界にいます。それを分別で考えるから一如の世界が分からないのです、忘れているのです。ところが死にかけになると分別の方が間に合わないようになる、ほんとです。

だから「信心」と言うと僕はすぐに「何か立派な気持ちが起こる」とか、「何か確固たる信念みたいなものが起こるとか」、そんなことを思うのです。最初みんなそう思うのですが、それは違うのです。はつきり言います、「信心」とは「分別を超えた、大きな一如の世界に初めからあったということに目覚めた心」です。それを表しようがないから「阿弥陀を信じる」ということで表現をするのです。いいですか、言っていること分かりますか。

僕もずっと「信心がほしい」そう思ってきた。「信心をもたないといけない」と昔の人は言うでしょう。「信心いただきて・・・」とか一生懸命にやってきました。だけど何時までたつても何も起こりません。そういう人間の分別が破れたとき、間に合わないようになった時、「ああ、人間よりも大きな世界がはじめからあった、そうなのだ」

と初めて頭を下げる。それを「信心」という言葉で表すのです。

#### 經典―絶対の自信の拠り所

私は本当のことを言っています、アホなことを言っているようですが私は絶対間違っていないことを言っています。

親鸞聖人の『教行信証』は、(今から言うのはなんです)全部『大經』の言うとおりに書いてあります。それが親鸞聖人の自信です。だって、お釈迦様の言っている通りに書いていますから。

いかにも自分の直感とか自分の感動とかを書いてみると、みんな言うのですが、それは違う。自分の感動とか直感とかいうのが一番あてにならないのです。さつき言ったように、気分のいいときはい、でも気分が悪くなるよりくなくないです。そんなものはあてにならない。自分さえもあてにしない。

確かに念仏によつて救われた感動はある。しかしそれをそのまま直に表すのではなくて、それを『大經』で、お釈迦様と阿難が会ったとき阿難はどう言ったか、その阿難の言ったことをお釈迦様が解説しているが、それはどう言っているかと、『大經』にのっとりながら自分の感動を述べているのです。親鸞聖人は經典の通り言っているのです。

善導大師は、自分が書いた『觀經疏』を「一字一句変えるな」と書いている。みなさんは、自分が書いたものを一字一句変えるなどいうのはどういう意味だ、なんと傲慢な、偉そうに言うな、と思うでしょう。でも、それは善導大師は「変えたらいけない、お釈迦様が言ったとおりに書いたから」と言っているのです。

そんなふうに『教行信証』を通り越して『大經』のところに着地するまで勉強すること、すると親鸞聖人が言っていることがちゃんと間違いないことに気づきます。親鸞聖人はそうだったと思います。

今申し上げたいことは「なぜ法然が念仏の法を大切にされたのか」です。このことについて申し上げたいのです。それは、ひとつは善導大師の思想を直輸入したからです。もうひとつは法然門下を念仏ひとつでまとめたいこうとしたからです。

### 信行両座

もうひとつ信心と念仏について問答をしたのがあります。それは「信行両座」の決判です。

法然門下のお弟子、三百八十人が集まったときに、親鸞が「今日は信の座と念仏の座を二つ設けます。みなさんどっちかに座ってください」と言ったのです。法然上人がいつも「念仏、念仏」と言われるのですから念仏の方と思いますが、すぐにはどっちに座っていいかわからないので、みんなうろうろしています。「信心が大事なのだ」と信の座に座ったのはわずかに三人でした。念仏が大切なのはあたりまえです。法然上人が「念仏しましょう」と言うときみんな念仏します。表向きはみんな念仏者です。だけど本物か偽物か区別がつかえません。法然上人はそれをわかってやっているのです。しかし、それを全部包んでしまう。吉水の内側が割れたら困るからです。

三百八十人全員を抱え込んでいても、「信心」と言った人は四人しかいないのです。その四人で浄土宗を独立というのは無理です。「あほか」と言われるに決まっています。「信心」を表に出して「信か行か」ということをはっきりすると、浄土宗の独立どころではない。自分のところが分裂するかもしれない。それなら「念仏ひとつでいい、善信いらんことをいうな」と言っただけでいいけれども、「わかっているから、いらんことをいうな」と言いたいところなんです。ただ親鸞までも包むのです。だから法然は偉い人です。そこは偉い。

法然は偉いです。自分が念仏の思想によって救われたということ

が第一です。それから門下のお弟子をまとめて、浄土宗の教えを独立させるためには念仏ひとつで押し切っていくしか道はないと考え、念仏ひとつを旗印にして浄土宗の教義を全部まとめた、それが『選択本願念仏集』です。そういう意味では偉いのです。

まだ言いたいのです。

(言い出すと僕だけが感動するから・・・)

例えば、源信の『往生要集』の講義が四つ残っています。法然全集を見たらわかります。一番古い『往生要集』の講義には最後の方に、さっき言った「いいことをしている時には反省が効かない」という問題がとりあげられている。

### 浄土宗は半分聖道門

浄土教に帰依した三百八十名のお弟子がいる。その中でも、やはり戒律を保っている方が立派に思える、だから戒律を保つ人たちが方が大きな顔をする。立派になる。仏教の世界に入っても、人間のまじめさとか、立派さ、そういうものを一生懸命にやると、やっている方は反省が効かない。だから法然の門下の弟子たちは浄土教なのですが半分聖道門です。浄土宗は現在でもそうでしょう、ちゃんと出家しているでしょう。

粟生に光明寺という浄土宗の本山がある。あれは法然が亡くなって十五年後、嘉祿の法難というのが起こる。親鸞が五十三歳のときです。そのときに、聖道門の連中が、つまり比叡山の僧たちが法然の墓を暴いて法然を傷つけようとしている、ということが発覚します。(これ、えげつないでしょう。なんでそんなことをするのかね・・・)しかし、これは明恵の本を読むとわかります(本物というものは死



んでも消えないのです。法然の弟子は法然が死んでからむしろどんだん増えていくのです。それで明恵が癩癩を起して『摧邪輪』を書くのです。

墓を切りつけるという情報が入るから、蓮生、**信生**…彼らはれつきとした武士です。その人たちが比叡山の僧たちより先に墓を掘って法然の骨を集めて西の方に逃げるのです。そして粟生という所まで逃げて、そこで法然の骨の火葬をします。そこが浄土宗の本山になっています。立派なところですよ。

僕らはその会館を借りて、学生を連れて行って騒いで、酒を飲んで暴れるわ、ガラスは割るわをして、たいへん怒られた。「おまえら、どないなってるのか、それでも仏教者か」と怒られた。私はどれだけ怒られたか…。その時に「この人たちは立派だな、浄土宗は聖道門なのだ」と思いました。

せつかく自力無効ということを通して、「念仏は大事だ」ということとは分かったのです。ところが「仏教もわからん若い嫁は何ともならん、あかん」と念仏まで自分の手柄にする。昔のじいちゃん、ばあちゃんにそんな人がいたでしょう。でもそう言うほど孤立する。その人は正しいことを言っているのです。正しいことを言っているのでも歯止めが効かない。ただど言うほどに本人は孤立していく、どうしてなんだろう。そんな人がこのへんにはおりませんか。田川にはおります。最近、その人は死にかかっている。だから、**その人に「じいちゃんのこととは正しい、でも正しいことを言う時は一番気を付けた方がいいよ」と言っただけました。**

それは二十願の問題です。「そこをどう超えるか」というのが大乘仏教の一番大事なところですよ。

法執（二十願）をどう超えるか

もうちよつと言いましょ。

世界には、自分が帰依した宗教が一番正しいと主張するものがあります。それがどんな問題をひき起こすかという自爆テロです。わかるでしょう。自分が帰依した宗教が一番正しいのです。そして自爆テロを起こす。自爆テロをやった人は聖人だと言って祭られる。そんなことをしてまた褒められる。

仏教者から見たらそんなものは迷いなんです。宗教の名を語って人を殺すなんて、そんな馬鹿なことがあるんですか。宗教によつて「我執」は越えたかもしれない。だが、今度は「我執」が法の方に執着して「法執」に変わる。「法執」に変わつたらこれは恐ろしい。いいと思つてどんどんつき進んでゆく。するとそこに必ず宗教戦争が起ります。

その「法執」をどのようにして超えるのか、そこに真宗の、そして大乘仏教の一番大事なところがあるのです。大乘仏教全体から言う「法執をどう超えるか」という問題、それは浄土教では「二十願をどう超えていくか」という問題になります。「二十願」と言うのは、自分は念仏に帰依したのだけど、「念仏は正しい」と念仏を大事にしすぎて、「念仏以外はだめだ」と言ってしまうことです。そうなるそれは「法執」に変わるのです。

その法執をどう超えていくかというのが実は今の世界の問題ですよ。

「法執を超える」、それが親鸞聖人の一番偉いところですよ。

『往生要集』の一番最後に二十願の問題が出て来る個所があります。『正信偈』だと

源信広開一代教 偏帰安養勸一切

## 専雜執心判淺深 報化二土正弁立

報土と化土、真の仏土と化の仏土とを正しく分けたのは源信僧都です。せつかく浄土に生まれたのに、自我の根性が抜けないから、浄土の片隅の方で金の鎖に繋がれて五百年の間そこにいる。それが「化土」です。本人だけ気持ちがいい、周りは全部気持ちが悪い、それが「法執」の問題です。だから、浄土真宗という仏教が法執をどう超えるかということが二十願の問題のところできちつと押さえられている。大事なところですが、これから少しずつ勉強していくことで分かって来ます。

法然は四つの講義の中で、一番早い時期の講義では、そこをちゃんと講義をしています。ところがだんだん新しくなる講義では、そこは講義をしていない。それは、二十願の問題、浄土教の中の「立派になろうとする問題」、そこをしつかり講義すると内部分裂するからです。だから法然は講義をしない。

法然という人は現実をよく見た人です、偉い人です。

## 一念義多念義の争い

その代り、問題が起きました。信心が正しい信心なのか、あるいは自力の混じった信心なのか、ということをや法然は明確にしなかつた。そのために法然門下に「一念多念」の問題が起きます。「いつペン念仏して廻心すればそれでいい」というグループと、そうではなくて「一生念仏を称えなければならぬ」というグループのいさかいです。「法然上人を見てごらん、一日にお念仏を七万回称えていた。(一日に七万回称えていたのです。休んだのは木曾義仲が京都に討ち入ってきた日、逃げて回っていたので七万遍はしなかつたらしい。一日七万遍です。僕らは十遍称えて嫌になる) 先生がそうなのだから、それも一生称えたのだから、念仏は一遍で救われる、そん

な馬鹿なことがあるか、一生称えなければならぬ」というのが「多念」です。

こんなふうにして法然門下は分かれていくのです。かなり大きな問題になります。実情はよくわかりませんが、承元の法難で流罪になった人たちは全員、一念義です。これは過激派です。「いつペン称えて廻心すればそれでいいのだ、あんな聖道門のようにやっている、あれはおかしい」というのです。だから一念義の人が早くから目をつけられていた、承元の法難で流罪にされた人たちのほとんど全員が一念義です。

ところがその中で親鸞だけが一念義ではありません。あれは別の問題です。風紀問題です。(今でも大変ですね、テレビを見ていたら、東出昌大さんも、いつの時代もそうです)「親鸞を見てごらん結婚している、そんなあほなことあるか」と。だから親鸞は法然門下全員から無視をされたのです。

例えば隆寛の書いた『一念多念のこと』とか、聖覚の書いた『唯信抄』とか、浄土教の先輩の書いた文章に「親鸞」と言う名は一遍も出て来ない。無視です。みんな立派になろうと思つているのに、それはそうです。「一番の問題はあいつだ、結婚、わけのわからないことをするな、あいつは坊さんだろう」と言われるのです。

親鸞は人間的に言えばある意味でかわいそうです。だけど、本願に生きるものは正直に生きたらいいのです。なんで偉そうに戒律を保たなくてはいけないのですか、正直に生きたらいいのです。そうでなかつたらみんな救われないうでしよう。

親鸞本人は特別なことをしたとは思つていないでしょう。あれは法然上人が「結婚しなさい」と言つたのです。だから親鸞は「はい」と言つて結婚したのです。法然門下というのはまじめで立派な人の

集まりだから、人間の倫理性の方が勝った教団になって、本当の仏教でなくなっていく。

### 法然の門下に残された二つの問題

だから親鸞の代になると、「念仏ひとつ」というよりも、「本物か偽物か」を信心のところできちつと明確にやっていく。これが法然門下の中のひとつの問題です。

もうひとつの問題は、明恵が『摧邪輪』という書物を書いて法然の『選択集』を徹底的に批判する。それは簡単に言うと「凡夫は悟りは覚れない、そして凡夫はあちこちうろろして生涯仏になる道から外れていく。なのに念仏ひとつで仏になる、そんな馬鹿なことがあるか」です。これが明恵の批判です。

どうして念仏によって仏になるのか、それは本願力によって仏になるのです。明恵の批判には、信心のところで本願のはたらきを明確にしていきたいと思います。

時間がなくて端折りましたが、法然はそんなふうに「念仏ひとつでいい」と言って浄土教を完成させた。

ところが、今申し上げたように、法然の門下に問題が残る。本物か偽物かを明確にしないと、どうしても念仏が明確にならない。

それから、外の批判に対してちゃんと答えないと、「凡夫が仏になる」という道が明確にならない。「念仏ひとつでいい、人間の力ではない」と言うのと、「そんな馬鹿なことがあるか」とだれでも思うでしょう。明恵ははつきりと「それは神がかりか独断か、どっちかだ」と言っています。

「凡夫が仏になる」という道は神がかりでも独断でもない、本願力によって仏になるのです。「凡夫でも絶対に退転しない、みんなその

ままで仏になるのだ」という道は、本願のはたらきを明確にしていつてこそ分かるのです。

### 無碍道―煩惱の中に仏の呼び声を聞く

「本願が人間を通して出て来ると貪・瞋・痴の煩惱として出て来る」さつき僕はそう言った。皆さん「そうだろうか」と思うでしょう。もし、それが本当にわかったら、逆に、煩惱が起こつてきたときに本願の声が聞こえる。

「金儲けしたい」|| 「仏さんが自由になりたいと言っている」、そんなふうに、煩惱の中に仏さんの呼び声が聞こえるようになるのを「無碍道」という。もう決して退転しない。そのまんまで凡夫道が仏道に意味を変ええる。すると、ちよつと明るい顔になります。「立派になつて」と思うからややこしいのです、「このまま」で救われないういけなのが仏教です。「このまんま」で仏になる道が開けてきた。それが無碍道です。そうでないと仏教になりません。煩惱が起こるたびに法蔵菩薩の本願の声を聞いていけるようになる。それが無碍の一道というのです。

一応、時間がきましたので今日はここまでで終わりにします。

南無阿弥陀仏

## 《質疑》

(質問者) 先回の講義でお釈迦さんが二つの道が説かれたということは、それぞれに意義があると思うのです。なぜ、二つ説かれたのかと考えてみたのです。私は、もちろん結論はわからないのですが、先生が講義の最後に、「親鸞聖人の二十年の聖道門の修行が無駄ではなかった」ということをおっしゃったのです。この辺に、このことの解決の答えがあるように思うのですが、そのあたりを少し教えてください。

(先生) 浄土教でいうと、先ほど申しましたように『大経』と『観経』があります。『大経』の方は本願の教えを直接説く經典です。それに対して『観経』の方は、『観経』のお話をちゃんとしましょう。そうするとわかってもらえます。

『観経』は皆さんよく知っているように、王舎城の悲劇、これが引き金になって阿闍世が自分の父親を幽閉して殺すという問題です。それは、自分が生まれる前、父親が子供がどうしても欲しかった。古い師にみてもらうと、アスト山の仙人の生まれ変わりとしてあなたの子供が生まれるから、あの仙人が死んだら生まれ変わると言われた。王様はそれを待てなくて、その仙人を殺してしまうのです。そうして阿闍世が生まれてくる。すると今度は阿闍世は殺された仙人の生まれ変わりだから自分を殺すだろうという。

僕から言うと、自分ではどうにもならないものをみんな抱えている。顔つきだけではない。僕は父親が大嫌いだけど、そっくりです。そのように、人間は自分でもならない問題を抱えていて、それが引き金になって殺人まで起こってくる。殺人と言うのは単純な

話ではなくて、やはり何代にもわたって関係しているのです。そういう問題が人間には解けない問題としてある。そういうことが起こってきたことを縁にして霊鷲山からお釈迦様が降りてくるのです。そして韋提希に説法をする。

その時、韋提希は「なぜこんな子を産んだのか」と叫びます。お釈迦さんに言ってもしょうがないのに、でも人間はそうなるのです。そして、「うちの子があんなになつたのは友達が悪い、あなたはその提婆達多のいところではないか、どうしてくれるのか」といつてお釈迦様に食ってかかる。そして「苦しみから解放してくれ」とも言う。

その後に「我をして清浄業の処を觀ぜしめたまえ」と言う。これはちゃんと經典に書いてある。人間は自分だけ救われたらいいというのではない、「殺されたお父さんも、殺した阿闍世も、私も、みんな一緒に救われる世界が欲しい」と叫ぶのです。

その人に向かって今度は浄土を見せるのです。そうしたら「阿弥陀の浄土に生まれたい」と言うのです、どうしてかわかりますか。それは阿弥陀の浄土だけは能力を問わないからです。その他の諸仏の国は能力がいるのです。

韋提希が「なんの能力もいらぬ浄土に往きたい」と言うと、お釈迦様は「わかった」と言つて定善十三觀が説かれる。

「定善」というのは、ちゃんと座つて、座禅をくんで仏に向かう。これを息慮凝心という。慮りをやめて心を凝らす。雑念をやめて心を凝らして阿弥陀を見るという方法です。それを十三觀説かれます。まず太陽を見なさいという日想觀から説かれます。ところがこの十三觀が説かれると、なぜかお釈迦様は今度は「散善」を説き、「善いことをしなさい、悪いことをするな」と教えられるのです。

この「散善」のところに「至誠心・深信・回向発願心」の三つが説かれ、この三つがそろえば浄土に往生できると説かれている。その

深信積のところは二種深信が出て来るのです。「深信というは深く信じるころなり」と出て来る。

その深く信じる心に二つある。一つには「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。これが機の深信です。そして「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなく、かの願力に乗じて定んで往生を得」と信ず。これが法の深信です。

深信積のところは二種深信が出て来る。機の深信・法の深信、二つ出てきます。そこに自力から他力に目覚めていく関門がある。

機の深信のところに、自力無効、自力では救われないということを知って、法の深信、「かの阿弥陀仏の四十八願は」と『大経』の四十八願に乗じていく。それも『大経』の四十八願は「經典に書かれている」と思っていたけれども、そうではなくて、今、私たちのすべては、疑いなく慮りなく、本願の中にあつた、という目ざめがある、それが二種深信です。

上品上生から下品下生まであるのですが、善導大師はこの二種深信、下品下生を救う称名念仏に立って『観経』を読んだのです。聖道門はこちら側（上品上生、やればできるといふ立場）に立って出家して、戒律を保つて修行をするのですから、称名念仏は凡夫のための方便であると見た。これが聖道門の『観経』の読み方です。無量寿仏を観察する、これが本道、これができないものがしょうがないから念仏を称えるのだ、念仏を称えながら仏に対する信心を育てて、それをもとにして出家し、やがて悟りに到達する、というのが聖道門の行き方です。

ところが、善導大師は「定善十三観は自力無効を知らせる方便である。聖道門をつつんで自力無効を知らせるための方便である。最

終的には深信積のところは集結させて、自力から他力に目覚めさせるのが『観経』の教えだ」と反対に読んだのです。

そうすると聖道門の読み方と善導大師の読み方とは反対です。

私たちは親鸞聖人のところから見ていますから、「そうか、善導大師は偉ないあ」と思うかもしれない。

現在、『観経』の注釈書は四つ残っています。ひとつは天台宗を開いた天台智顛、『観経疏』を書いていきます。それに龍樹の弟子で嘉祥寺に住した嘉祥大師吉蔵きしやうという。これも『観経疏』を書いている。もうひとつは浄影寺慧遠えいおんと言いまして、これも『観経疏』を書いている。全部、「称名念仏は凡夫のための方便だ」という聖道門の読み方です。凡夫をつつんで仏を観る。

聖道門は反対に読んでいることが分かりますね。

そのように『観経』の読み方が違うのです。

今ご質問されたから言うと、親鸞も法然も聖道門を比叡山でやったのです。でも、できなかった。そして山を下りて還俗するかしないかで悩んだ。そしてこの散善の教えによって、自力から他力、念仏ひとつに目覚めていった。

真宗の立場から言えば、聖道門を包んで「聖道門は意味がないわけではない、がんばんなさい」です。みんながんばらなくてはいけない。なんとなく、いつか信心が得れるだろう、そんな馬鹿なことはない。そういうのを「柵からぼた餅」と言うのです。みんな死ぬような思いをしながら「念仏ひとつ」と言うところに目覚めていったのです。

だから、『観経』の読み方も、定善散善は聖道門ですから、聖道門

は無駄ではない、聖道門をやりなさい。やって自力無効が分かるまでやりなさい。もうちよつと行って自力無効が分かるまで、もうちよつと行って本願に目覚めるまで、頑張んなさい。そうなるとう道門の方が方便になるのです。だめなのではないのです。それを包んで、もうちよつと頑張んなさい、私たちが求めている悟りは自力無効に気づいたところにあるのです、というふうに言った。それが「穩頭」という親鸞聖人の言い方です。

法然上人の場合は「廃立」という。聖道門を廃して浄土門を立てる。そうなるとう聖道門は怒ります、戦いになった。聖道門は武力を持つていましたから法然は殺された。結局法然は流罪で死んだのです。廃立という方法をとると喧嘩をしなくてはならない。対して親鸞と言う人は偉い人です。「聖道門はそのままでいい、もうちよつと頑張りが足りない、やるならもうちよつとやりなさい、悟りのところに出られるまで頑張んなさい」と言った。

「観無量寿経」、聖道門はこれを「無量寿仏を観ずる」と読みます。ところが皆さんは気づいていないと思うけれども、『教行信証』を全部見てもらんなさい。『無量寿仏観経』と書いてあります。仏の方が私たちを見て、仏の方からこういう手立てを立ててくれた。これが『無量寿仏観経』です。無量寿仏の方が人間を観察しているのです。

方便化身土の巻の標拳ひょうけんを見てください。親鸞聖人は言葉に厳しい人です、その親鸞聖人が、ここに「無量寿仏観経の意」と書いてある。『無量寿仏観経』というのはない、あるのは『観無量寿経』しかないです。だけど無量寿仏が私たちをよく見て、観察して、そして、自力から他力に導くために『観経』を説いているのだ、こういう読み方です。

次のページ、「謹んで化身土を顕さば、仏は無量寿仏観経の説のご

とし」、ここも『無量寿仏観経』と読んでいます。無量寿仏の方がよく私たちをよく観察して、力がないということをよく知っていないながら、最初は「力を尽くしなさい」と教える、本願の教えに目覚めるためには「自力を尽くす」ということはどうしても必要なのです。だから、『観経』は必要な門という意味で「要門」といいます。

法然は「廃立」と言う。ところが親鸞は聖道門を包んで真実に導くということですから、親鸞の場合は「穩頭」と言います。「穩」と言うのは、表向きには『観経』はまるで修行の体系が説かれているように見える、けどもその本意は本願に目覚めさせるためである。「頭」と言うのは表向きの意味、「自力を尽くしなさい」という意味、それによつて隠れている裏の意味は「本願に目覚めなさい」という意味です。

そんなふうにして聖道門・自力を包んで法まで導いていく、それを浄土教の経典で言うとう『観経』の役目になります。それを今質問して下つたことからいうと、聖道門を全部包んで、「もうちよつとがんばりなさい、そして本願にたどり着くように」ということになりました。だから聖道門は必要なものなのです。

いいですか、わかりましたか。

文責は編集者の田畑正久にあります。